
苫小牧市美術博物館 紀要

第 8 号

(苫小牧市博物館 館報 通算19号、苫小牧市博物館研究報告 通算31号)

苫小牧市西部（錦岡地区～樽前地区の一部地域）におけるオオジシギの分布

江崎 逸郎

苫小牧市内における樺太引揚げ体験者への聞き取り調査報告

小杉 宇海

苫小牧市内で発掘されたアイヌ文化期の丸木舟

岩波 連

(令和4年度)

苫小牧市美術博物館

苫小牧市西部（錦岡地区～樽前地区の一部地域） におけるオオジシギの分布

江崎 逸郎 ※¹

1. はじめに

オオジシギ *Gallinago hardwickii* (図1) は、主に北海道とサハリン南部で繁殖し、本州および九州の一部でも繁殖する。越冬期はオーストラリア東海岸一帯およびタスマニア島北部で過ごすことが知られている。本州より南では繁殖地が減少しており、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されている。近年では普通に見られた北海道でも減少が指摘されており、その生息状況の把握は急務である。(公財) 日本野鳥の会が2018年から2020年にかけて行った調査 ((公財) 日本野鳥の会 2020) では、越冬地であるオーストラリアの森林火災が影響して42%も減少したことが指摘されており、オオジシギの個体数を監視することがより急務となっている。

苫小牧市のオオジシギは、勇払原野を中心に農耕地や海岸付近の草地など広く生息し、市街地周辺で観察されることもある。しかし、勇払原野以外の場所で個体数や分布を調査した記録はほとんどない。オオジシギが好む生息環境は、ヨシやスゲが生える乾いた草原、ササ原、牧草地や畑などの農耕地などだが、このような開けた環境は、工業や住宅の用地として開発される可能性が高い場所でもあり、近年では、太陽光パネルが相次いで設置されている場所も多い。今後も改変されやすい状況が続くと思われるため、現在のオオジシギの生息状況を明らかにし、その変化を監視することが生物多様性保全のためには重要である。

今回、苫小牧市西部の一部の地域（錦岡地区～樽前地区）において、車で移動しながら観察したオオジシギの個体数と位置を記録する簡易的な調査を実施した。その結果に基づいて分布等をまとめたので報告する。



図1 オオジシギ

※¹ 苫小牧市美術博物館 学芸員

2. 方法

調査地は、北海道苫小牧市西部の錦岡地区（北緯42° 35'59" 東経141° 28'42" 標高5.5m）から樽前地区（北緯42° 35'17" 東経141° 26'1" 標高6.5m）までの約4.5キロの区間で、道路上の調査ルートである（図2,図5）。調査ルートの南側にはJR室蘭本線の線路が並行しており、その南側の線路と国道36号線にはさまれた場所に、エゾキスゲ *Hemerocallis lilioasphodelus* やノハナショウブ *Iris ensata* などが咲く草地が広がる（図6）。また、調査ルートの北側には農耕地（図7）や砂利採取地が広く分布し、草地の面積は狭く、太陽光パネルが設置された場所も散在する（図8）。

繁殖期のオオジシギのオスは、ジジジジッーと大きな声で鳴きながら上空を旋回した後に尾羽を広げながら急降下する目立つディスプレイフライト（図3）を行う（浦 2007）。ディスプレイフライトは4月末から5月上旬にかけてピークを迎え、次第に減少し、7月上旬にはほとんど観察されなくなる（新田・藤巻 1985, 中村・重盛 1995, 飯田 1991）。また、その活動がピークになる時間帯のひとつは6時から8時までとされている（新田・藤巻 1985）。

以上の生態を考慮し、調査は2021年5月6日から7月14日まで、5日間以上の間隔を空けないようにして合計37日間、午前7時15分から45分の間に実施した。荒天時を避けた晴天もしくは曇天の日、車を使用して時速約20kmで走行しながら、飛翔している個体や電柱等にとまっている個体など、目視で確認できる全個体数とその位置を記録した。調査員は、運転手と記録員の2名とし、助手席の記録員がすべての観察と記録を行った。

結果は、GIS（QGIS 3.28 Firenze）を用いてオオジシギの位置を地図上に落とし、さらに確認された地点の数を100m×100mのメッシュ内の色の濃淡で分けて地図に示した。

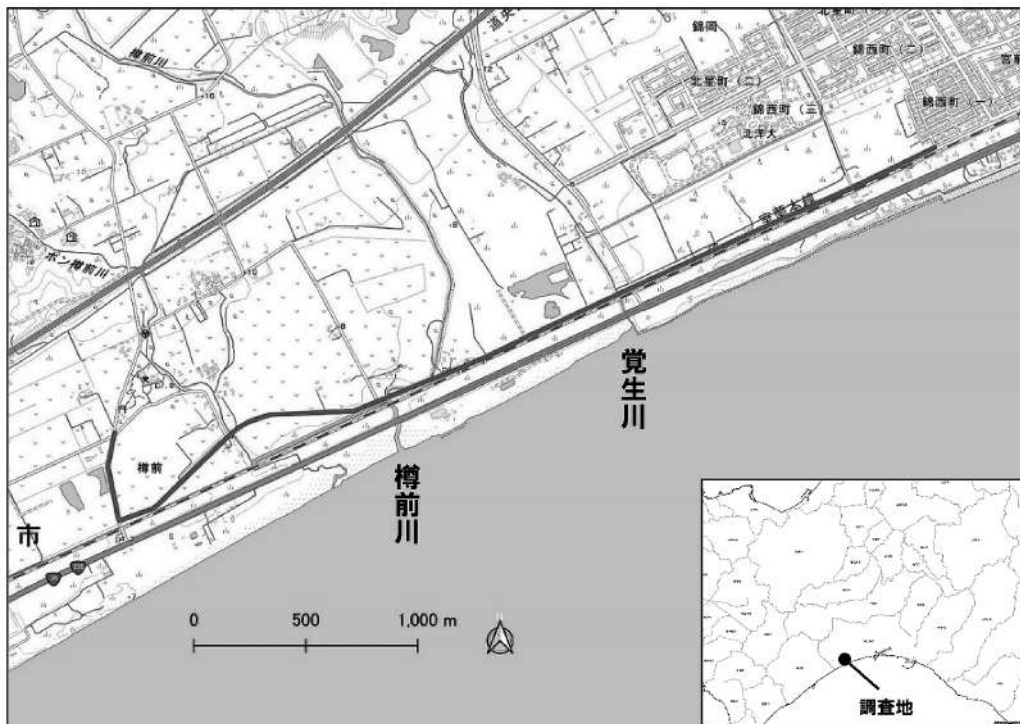


図2 調査地と調査ルート（地理院地図「電子地形図タイル」を加工）



図3 ディスプレイフライト



図4 電柱上のオオジシギ



図5 線路沿いの調査ルート（錦岡）



図6 線路南側の草地（錦岡）



図7 調査ルート沿いの農耕地（樽前）



図8 調査ルート沿いの太陽光パネル

3. 結果

オオジシギは、調査ルート全域で観察された（図10）。調査期間中の一日に観察された個体数は0～10羽、平均 3.3 ± 2.6 （標準偏差）羽（ $n=37$ ）であった（図9）。調査ルート上を流れる二つの川を境界として記録地点を比較すると、樽前川の西側で最も多く（76地点）、次いで覚生川の東側（41地点）、覚生川と樽前川の間（4地点）だった（図10,図11）。記録された個体があった場所は、電柱上（図4）が92回（75%）と最も多く、次いで上空（ディスプレイフライト）が18回（15%）、太陽光パネル関係の人工物上が8回（7%）、その他4回（3%）であった。

調査期間を通してみると、調査開始から徐々に増加し、5月25日に調査期間中最大の10羽を記録した。6月上旬には1～2羽の記録に留まる日もあったが、6月中旬には再び一日で5羽以上記録する日が続いた。7月に入ると極端に記録数が低下し、7月11日からは調査最終日まで1羽も記録されなかった（図9）。前述のとおり、日中の活動個体数に明確な季節変化が存在すること（5月中旬にピークを迎え、以降7月にかけて減少していく）は、道内の他の調査からも明らかになっており（新田・藤巻 1985, 中村・重盛 1995, 飯田 1991）、本調査の結果も同様の傾向を示した。

今回は車（時速20km）で調査を行ったため、地面にいる個体や飛翔個体など、車の速度や助手席からの視野では確認しにくい場所にいた個体を見落とした可能性が高い。そのため、最大10羽とする個体数（図9）は正確であるとはいえない。しかし、調査期間中の調査方法は一律であるため、個体数の季節変化や分布のおよその傾向は得られたと考えている。

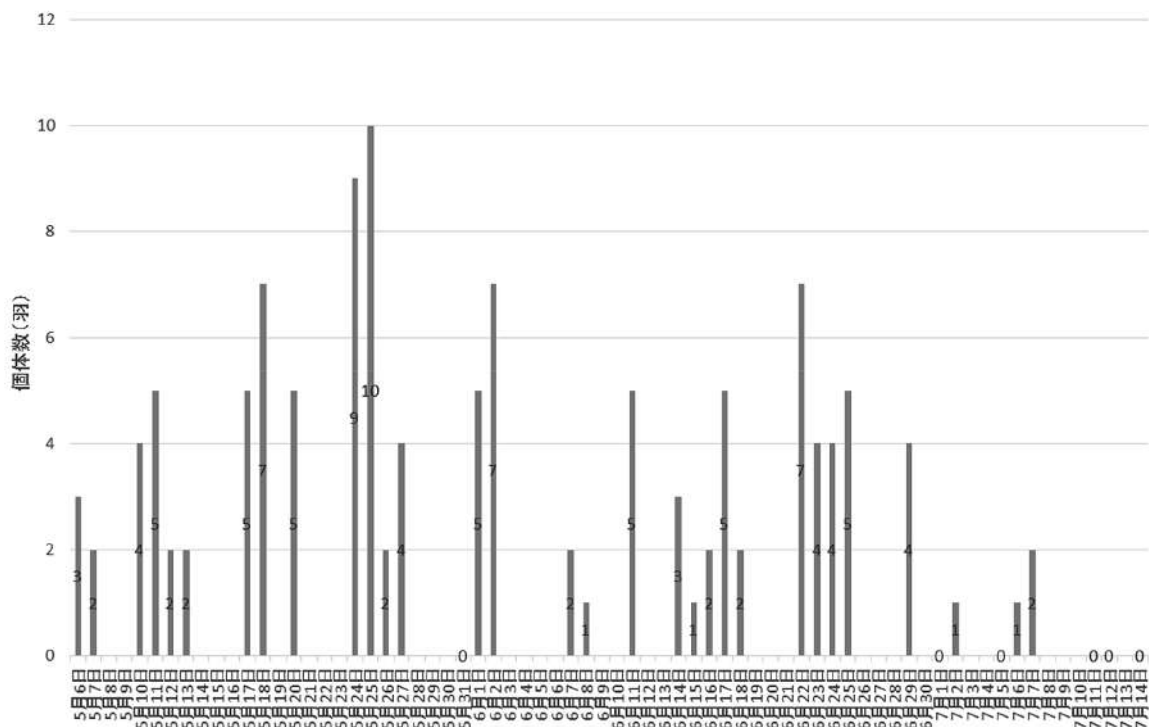


図9 調査期間中に記録されたオオジシギ個体数

*調査をしたが0羽だった日は0と表示。グラフも数字も示されていない日は調査しなかった日

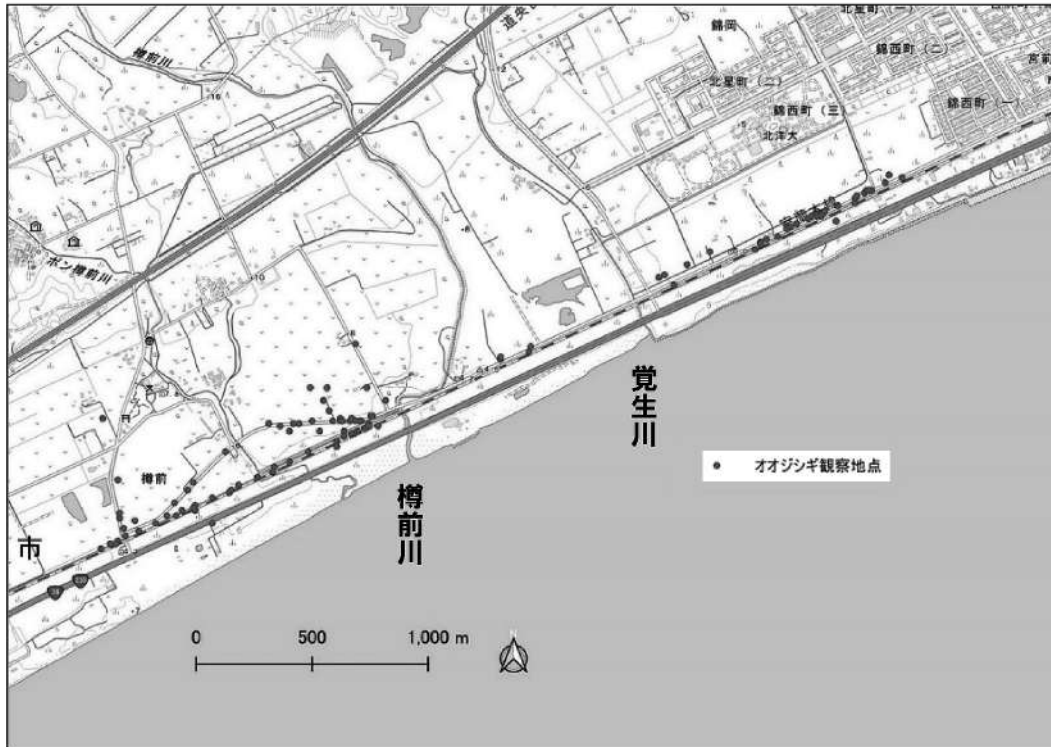


図10 調査期間内に記録したオオジシギの全観察地点（地理院地図「電子地形図タイル」を加工）

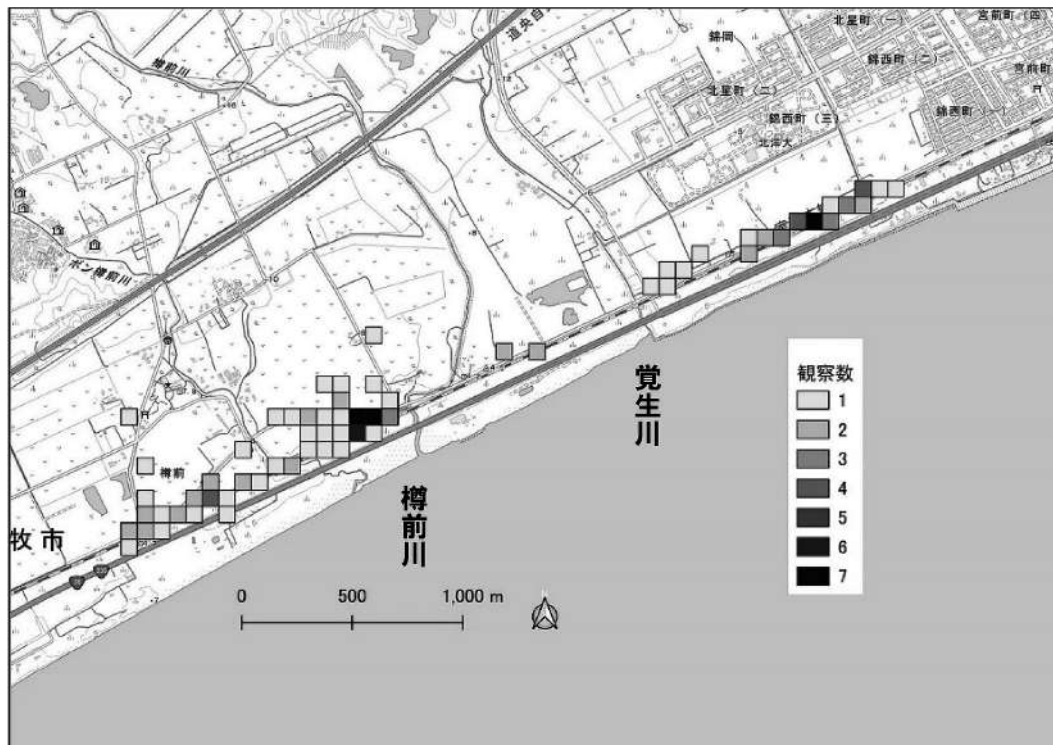


図11 図10を元に作成したオオジシギの分布（地理院地図「電子地形図タイル」を加工）

4. おわりに

今回の報告では、オオジシギが多く分布している場所とそうでない場所では何が違うのか、その理由までは明らかにできなかった。しかし、オオジシギが多く分布していた場所は、オオジシギにとって良好な生息環境が保たれている可能性がある。前述したとおり、オオジシギが好む開けた草地や農耕地のような環境は開発の対象になりやすく、その増加によって生息地の消失や個体数の減少を招く恐れがある。今後は、より広域的なオオジシギの生息状況を把握するとともに、土地利用との関連性の解析や継続的なモニタリング調査を検討したい。そのデータの蓄積が、生物多様性の保全に資する基礎データになっていくと考えている。

参考・引用文献

- 飯田知彦（1991）オオジシギ*Gallinago hardwickii*の繁殖行動と生息環境. Strix10:31-50.
- 浦達也（2007）オオジシギ. バードリサーチニュース4(10):4-5.
- （公財）日本野鳥の会（2020）オーストラリアで大規模森林火災を引き起こした異常気象により北海道内のオオジシギの繁殖数が推定で42%減少したことを確認（3.5万羽→2.0万羽に!?）.（オンライン）<https://www.wbsj.org/activity/press-releases/press-2020-07-03/>, 参照 2023-3-1.
- 中村浩志・重盛究（1990）オオジシギ*Gallinago hardwickii*の繁殖期における日周活動と社会構造. 山階鳥研報22:85-113.
- 新田和弘・藤巻裕蔵（1985）繁殖期におけるオオジシギの日周活動の季節変化. 鳥34:49-55.

苫小牧市内における樺太引揚げ体験者への聞き取り調査報告

小杉 宇海^{※1}

はじめに

本報告は、筆者が令和2（2020）年度から令和5（2023）年現在まで継続して行っている市内在住の樺太引揚げ体験者への聞き取り調査の結果を中間報告するものである。

太平洋戦争終戦後、苫小牧市（当時は苫小牧町）には樺太（現サハリン）をはじめとする外地から引き揚げてきた人々が多く移住した。これは王子製紙との関わりが大きな要因となっている。日本領期の南樺太には、王子製紙の操業した製紙工場¹が9か所に存在した。昭和20（1945）年のポツダム宣言による終戦、その後のソ連軍侵攻により、樺太島内に居住していた住民は日本へと引き揚げることとなったが、その際に会社を頼って王子製紙のあった苫小牧へ移住した人々が少なくなかった。そのため、苫小牧市内には現在でも樺太出身者が多く居住している。

戦後78年が経過した今、自身の戦争体験を鮮明に記憶し、語ることができる人は年々減少している。そうした中で、かつて日本領であった樺太について、そこでの生活の様相、戦時体制の暮らしへの影響、引揚げ当時の状況などについて聞き取りをし、後世に語り継いでいくことが急務となっている。本報告では、令和4（2022）年12月時点までに11人の引揚げ体験者（親族を含む）にご協力いただき行った聞き取り調査のうち、野田町（現サハリン州チェーホフ）出身の石塚ヒデ子氏の証言を紹介する。石塚氏は昭和11（1936）年生まれ。聞き取り調査は令和4（2022）年5月27日に実施した。

本稿は、聞き取り調査時に録音したものを筆者が文字起こししたものである。石塚氏による加筆・修正と、筆者によるカッコ書きでの語句の補完、語順の入れ替え、語尾の修正の他は、音源のまま書き起こした。また、樺太に関係しない部分、個人情報に大きく関わる話等は省略した。

1. 野田町と生活の記憶

聞き手：ご出身はどちらでしょうか？

石塚氏：私がいたところは、樺太の野田郡野田町浜町、西海岸。浜町だったと思います。西海岸なんですよね、野田ったらね。それで、これ（地図）を見ると、ちょうどここが野田なんだね、西海岸でね。そしてなお浜町だからね、海のそばだったと思います。

聞き手：野田だと王子の工場があったかと思いますが、ご記憶ありますか？

石塚氏：はい。

聞き手：工場の周りで遊んだような記憶は？

石塚氏：王子の工場っていうんでなくて、私の父は^{おおにわ}大庭さんという酒屋さんにいたのね。大庭って言ったと思うんですけど。それでね、川がずっとあって、大庭さんっていうお酒屋さんがあったその後ろのずっと一番端に住んでいて、ドアを半間ずつ開けて通ると貯蔵蔵とかビン類とかお米蔵とかお酒を造るところとか、そういうのがずっと続いているところで。ここで言ったら、そうですね、自分が小さい時ですから、半間のドアを開けると一町くらいあるのかなと思うくらい。だから小さいとき遊んだ覚えとしては、お酒のビンにレッテル貼ったり、板粕をおやつにして食べたり。だから今も日本酒が好きなんです。板粕今でも好きです。甘酒にするより焼いて食べ

※1 苫小牧市美術博物館 学芸員

るのが大好きです。屋根も続いていて、屋根に上がったら上からのぞいて下を見るっていうお転婆をして遊んだ記憶がありますね。

2. 終戦時の記憶と学校でのロシア人の様子

聞き手：引揚げされた時のご年齢って覚えていますか？

石塚氏：3年生です。3年生の秋くらいじゃなかったかなあ。でも、その引揚げるまでの過程がいろいろありますよね。

引揚げるまでの中で、引揚げる時の話よりもっともっと（前の）その生活、野田の町ってね、山の上に小学校があったんです。それで、坂に全部大人が頭をつけて平たくなって泣いて聞いている。天皇陛下さんの言葉をみんな大人の人がたが地べたにこうやって泣きながら聞いている様子²のところに、私は小さかったからぽかんと立ってね、どうして泣いているんだろうっていう記憶がすごくあります。

それと、野田の小学校があったとしたら、日本の学校は1年生、2年生、3年生って上がっていくんですけど、私のずっと記憶しているところでは、学校の教室の半分をロシアが使うようになって、その半分の所の3分の2が確か日本の生徒がごっちゃにされて、あとは朝鮮の人が使うというところで、ロシアの人たちが、5年生、6年生になると1クラスが5、6人なんですよね。どうしてああいふんだろうって聞いた時に、1年生、2年生、3年生くらいまでなると、ロシアはみんな試験を受けないと上がっていかないんですよ。1年生から2年生、2年生から3年生。そうすると3年生くらいっていうのが1クラスがすごく多くて、背がこのくらいの中にびよんびよんと大きい人がたが混ざって多くなる。そして、何回試験を受けても落ちるとその人がたが学校を辞めて、クラスの生徒がどんどん減っていくんですよ。

聞き手：それではもう小学生の頃から学年が上がるには試験が必要だったんですね。

石塚氏：その起点が私の記憶では3年生くらいだったと思います。その人がたが労働者になるんじゃないかと思うんですよ。ロシアって、生活自体が白パンと黒パンに分かれているようでした。労働者の人って黒パンで有名ですけどね、日本でいう角食みたいな大きな長いパンを抱えて歩いてる。黒パンも有名だけど黒パンと白パンに分かれているのはわりと労働者と管理職の人に分かれているような気がします。小さい時の記憶だからね。そんな学校教育のことが目に映って、だからお金がない関係なく試験受かっていくと数少なく残っていく人がたには国がお金かけてどんどん教育していくようでしたね。1学年上がるための試験があることが、日本との違いでした。それが記憶にあります。学校の窓からこう覗くと、1クラスで運動しているのに5、6人しかいないんですよ、6年生くらいになってもね。そしたらやっぱりそこまで達するって言ったら全部試験受からないと落ちていくでしょ。そういう光景が残っています。1番上がっていけない線が3年生くらいだと思います。

3. 引揚げ前後の記憶

聞き手：日本に引揚げられた時の港はどこから出発したとか覚えてますか？

石塚氏：引揚げるのはね、真岡。その真岡の第一収容所、第二収容所通って、そして船に乗ってきました。函館に着きました。

聞き手：その際に、一緒に引揚げて来られた方、どなたと引揚げて来られましたか？

石塚氏：家族みんな。父、母、私、長男、次男、妹2人います。6人兄弟です。1人は北海道に来てから生まれたので、（引揚げ当時は）5人兄弟のうち（私以外に）4人。全部で7名。

聞き手：函館に引揚げて来られたあとに、住まれていたのはどこですか？

石塚氏：函館に住んでいたのですが、函館は父方のほうの叔父が教会を作る仕事をしていたようですが、室蘭の方に父の姉が旅館をしておりまして、そこに落ち着いたんですよ。だけど、母はその頃やっぱり今思うとね、下でみんなが楽しく食事しているのに私たちはそうじゃないのを見て、樺太で豊かに暮らしてきただけにやっぱり母はそういうのが耐えられなかったんでないかなあ。それで苫小牧に王子製紙関係が多かったから、母の兄弟がたくさんいましたので苫小牧に来て、父が王子製紙の中の山林というところに入りました。

聞き手：終戦の時には樺太にいらっしゃったんですもんね。

石塚氏：22年の引揚げだったかなあ…何年の引揚げだったかちょっと忘れちゃったけれど。昭和22(1947)年頃ではないかと思います。

そしてたまたまね、(地図を見ながら) こんなようにここに志方さんって写真屋さんあったでしょ？志方さんの写真屋さんが私のうちからいったらこういう感じでね、川のそばにあったんですよ。そしてあの頃、昔はね、川に、ガラスに人が写ってるの、みんな川のそばに捨ててたんだね。それを私たちは拾ってこうやって透かして見て遊んだ覚えがあるんです。

樺太で引き上げるまでの思い出の中っていうのはね、結局みんなコーリャンを食べてたんだけど、あんなような掛け軸のような色のね、粒の小さいのがコーリャンって言って全く食べにくかったらしいんだけど、私は食べる物には恵まれていたようです。

聞き手：終戦してから引上げるまでの間も、特に食べるに困ることはなかったんですね。

石塚氏：はい。何故かお米と食べ物たくさんありました。ロシアの人たちが、兵隊さんがお砂糖持ってきて米と交換してあげたりね、そんなことして食べるものには不自由しないで過ごしました。

そして、父がどんな役割をしていたのかよく分かりませんが、何故引揚げることになったかっていうことは、今思いますと帰ってきてから教えてもらったんだけどね、夕方になると私たちに、きちっとお座りして食事をする父で、着物の好きな父だったんだけど、夕方になると背中を向けてなんか飲んでるんですよ。そしたら、今はこんな医学が発達してるけれど、お醤油を飲むと熱が出るんですってね。医者に分らない熱が続くんですってね。昔の兵隊さんたちが病気をこまかすときに、とかそんな話をちらっと聞いたことがありますけれども、それでこの人は日本(樺太)においても病気が分らないから早く帰しましょう、子供もいるということで引揚げることができたんです。何で父が背中を向けて、毎日毎日決まった時間になんか飲んでるなあと思ってたのがね、お醤油を飲んでいたらいいです。そしたら医者に分らない熱が出ると。もう何十年も、60年も70年も前のことですもんね。そんな古い時代ですよ。

そして父は器用な人だったから、終戦になってから朝市が始まったんです。そうするとお米でもって今でいう串団子、あんこつけた串団子ね、あれを作って朝市に売りに行くとすぐ売れて帰ってきたのが記憶にあります。それで、今思うと大庭さんって酒工場の所は何になったかって言ったら、私の記憶では日本のお漬物ってあるでしょ。キャベツとかニンジンとかいっぱい切って、酒の樽に、モッコ³にね、キャベツとかアレをしょって、こういう大きなお酒を造ってる、よくテレビに出るところにね、モッコにたくさん、ニンジンとかキャベツを切ったのをに入れて漬物作ってた。そういうふうに変ったのを見えています。お酒つくるのを辞めてからだと思います。たくさんこう、机の上でみんな女の人たちが集まって切ったのをモッコに入れて、階段まで上がってそれを樽に入れるのまでは見たことがありますから、漬物漬けていたんだなあ。

聞き手：終戦後には(大庭さんは)お酒屋さんを辞めちゃってたってことですか？

石塚氏：辞めてたんですね。そのことは、今思うとよく分かりません。

4. 密航の密告、当時のロシア人の印象

石塚氏：こんなこと話していいのか分かりませんが、引揚げるのに密航ってあるでしょ。引揚げ船に乗るより早く帰りたい人がたに、兄弟が多いからってね。ここがうちだったらここに川があって、ここが野田の役場っていうのかな、山のこういうところあってこの辺からね、船に乗せて密航したときに、朝鮮の人の密告で、母の妹二人がロシアの兵隊に追いかけられたんです。その妹たちがたくさん物を背負ってロシアの兵隊に追っかけられながら逃げてきて私の家の玄関入ってきました。だから今でも時代劇見ると（出てくるような）襖がこう開いて部屋、1、2、3、三つくらい襖開いて一番奥の所にこう、押し入れがあって、広い押し入れでここに廊下があったところの一番奥に隠れたんですよ。そしたら、ロシア兵が土足で入ってきてね、父と叔父の胸に銃を突き付けて家中探された思い出とかね、あれ見つかったらその場で殺されてるよね。

そして、ロシアの人たちって、私があなたのものを盗んでも、子どもの頃ですからね、出窓があった家にいたんですけどね、そしたら、ロシアの子どもたちが来てね、物を盗んでいくんですよ。でも、現場を押さえないと、盗んでも罪にならなくてね。牢屋のことチョロマンっていうんだけど、物盗んでも現場押さえないとチョロマンハジー（牢屋に行こう）とも言えないし、罪にならないんです。そんなことを思ったり。

それから黒パンを食べてる人がたの生活だと、今思いますとね、この茶の間、日本でいう居間だね、その居間の中に豚もいれば鶏もいれば人間も一緒、大きな洗面器でもね、人間使ったのでも豚なんかに食べさせたり、でも寝室だけはすごくキレイにして窓をきれいにカーテン付けるっていうのをね、よく記憶あります。それから白パン食べてる人がたの家に行ったら、まったく素敵なんですよ。そういうふうに居間の中になんでもごっちゃにして動物と一緒に住んでなくて、ちゃんとメイドさんを使って奥さんも仕事に出て。だから、働かざる者食うべからずとかっていうよね、日本の言葉でないかなと思うけど。だから、ロシアの生活って白パンと黒パンに分かれてるんだなあっていうことをね、小さくても記憶しています。

聞き手：階級がはっきり分かれていたんですね。

石塚氏：そうね。だから考えてみると、階級がはっきりとする分かれ道が、その学校教育の中の3年生、試験で上がっていけない人たちが労働者になっていくんでないかね。そんな記憶を持っていました。

聞き手：密告で追いかけられたお母様の妹さん二人についてですが、お家に入ってきて一番奥の押し入れに隠れたその時には見つからなかったんですか？

石塚氏：見つからなかった。その押し入れもね、一間の押し入れじゃなくて後ろがこうなってるからね、広かったんです。そして、今でもよく覚えているのはその押し入れの隣に廊下があって、トイレから見ると役場のね、ずっと島の所のね、だから樺太の端っこだと思うのね、そこが見える。逃げてくるのも見えたし、ほんとあの時は父が殺されるんでないかなと思いました。

聞き手：ということは、妹さんたちは石塚さんの家まで逃げてきたということですか？ どこから…？

石塚氏：そう。船が出発するところから逃げてきて、逃げて家までたどり着くのに背負ったものは投げて、だんだん身軽にして。追っかけられるから。そして、家に来たときは二人で、奥にかくまって、閉めたとなんにロシア兵が来て、恐ろしい目だった。昔の家って靴脱いで上がるのがこのくらい30センチくらい、そこに土足で上がってきてここに二人、父と叔父が両手上げてね、銃を突き付けられて、そんなのが怖い思い出になっています。母の妹二人は次の日、投げ捨てた荷

物を拾いに行っていました。

聞き手：ということは、妹さんお二人は船に乗って引き揚げようとしていた、その途中だったんですね。

石塚氏：そうそう。普通のルートでなくてね。そういうこと（密航）結構みんなしたのよね。それから、もう亡くなったけども叔父たち二人は、稚内まで密航して船が流されそうになって、ひょう疽にかかってね、助かった。二人とももう亡くなったけどね。そんなことは記憶にあります。（叔父たちは）稚内について、やっぱり苫小牧に来ましたけどね。その他の人がたは、みんなちゃんと引き揚げてきたけどね。ロシア兵に追いかけられた母の妹二人も、その後普通に引揚げてきました。

聞き手：終戦から引揚げるまでの間にロシア人と住んでいたという人もいるのですが、石塚さんはそういうことはなかったですか？ ご家族だけで暮らしていましたか？

石塚氏：はい。うちは家族だけ。ただその、ロシア兵が来るとき女の子とか女性を見たら食べられるからと言って山に疎開しましたよね。それから、防空壕を大きく父が掘って筆筒とか全部入れて、半分しかできてないうちに空見たらB29が飛んであるいて、そういう景色も残っていません。筆筒とかそういうもの全部いれたけど、半分まだ屋根をつけてなくて、そこに入ってるときに空が半分見えて、B29が来た来たって指さしながら見たり。

そして樺太ってね、食べ物としてはバナナなんて生じゃなかったから、干しバナナだったんだよね。北海道に来て、初めて生のバナナを食べたの。干しバナナって黒くてね、そういうのだったの。まだまだ生活のことならたくさんあるけど、今ふっと出ないんだけどね、でもみんなのようにコーリャンを食べないで、白米を食べれて幸せに暮らしましたね。

6. 引揚げ時の苦勞、収容所の様子

石塚氏：引揚げてくるとき、一番私が心にとめて今日の話、これを言ったら私の心がすっきりするなって思う出来事が一つあったのは、例えば、父と母と私が長女で、このすぐ下の弟がね、疎開してくる名簿に名前がなかったために、どうやって…これは後で聞いたんです父と母から。どうやってこの子（名簿に名前のない弟）を連れてくるかっていうことで、今は船に乗るっていったらまっすぐ行くんですけど、いつもテレビでも船にこう、上がっていくのが出ますでしょ。そうすると、あそこをどうやって下で受付して、父と母がアレ（通過）したのかなと思うくらい。したらここに角巻ってというのがあるよね。厚いのね。角巻と、父は体格が良い男だったんだけど、父と母がぴったりくっついて弟に足を上げさせて、小学校1年の男の子だからね、間に挟んで、子ども2人、普通だったらよその家は、はじめ父なら父、最後母なら母ってことで子ども連れて歩くんだけど、父と母がしっかり手をつなぐようにして、中に子どもの足隠して船に乗せた、それであの弟は連れてこれたの。角巻ってこうなってるでしょ、広がってこうやって羽織って、そうしたらここ隙間あくでしょ、そして父は外套着てるでしょ。だから、船に乗ったらほんとにやれやれとしたんだろうなと思う。それで私に妹二人をしっかり手つないで母にくっついておいでよって言われてね、その通りにしました。帰ってきてから教えられたのが、父と母がね、そこで見つかったら置いてこなきゃならないからね、そしたら後でテレビにね、よくテレビにロシアの人がたで置き忘れた子どもたちとか、ああいうふうになってたんだねっていう話をしたことがあります。

聞き手：それはどうして弟さんの名前だけなかったんですか？

石塚氏：例えば、町内で名前を書いて、役場で全部、今みたいに物なんて整頓されてないしょ、きっと。それで書いたものが落ちてたのかなんか知らないけど、たまたま名前がなくて。そした

ら乗るときに調べられるでしょ。五十嵐家何人って。父と母と子どもたちの名前とね。そうしたら、弟の名前がなかったんですよ。それをどうやって船まで乗ってしまうかっていうことがね。それは船に乗るまでの話ね。

そして、真岡の第一収容所に、野田の町から列車に乗って行って、雨の降る日だったけれども、一番恐ろしく感じたのはね、次の日も天気が悪かったんだけど、こういうふうになだらかに学校に上がっていく道路があったのに、急いでみんな上がろうってことになって何々家のお父さん、子どもたち、お母さんっていう、土手を上った覚えがあるんだよね。それでそのあとで「きけ、わだつみの声」という映画を見た時に、そういうのがあって、ああ私たちもああやってああいうところを上ったんだよなって思って、そして第一収容所だったか、第一収容所から第二収容所に移った時か知らないんだけど、全部裸にされたんです。入った時に裸にされて、私たちは今でいう蒸し風呂っていうんですか。この入り口からいっぱい、なんか、お風呂に入らないでね、こう、蒸されたような感じでね、こっちへ来たら自分たちの服が消毒されて、ここでちゃんと着たんだけど、びっくりしましたねえ。そういうことも鮮明に覚えています。なんで裸にされたんだろうって。こっちの入り口から入ってもう裸でね、恐ろしいなって歩きながら、こっちに出てきたらちゃんと着た服があって、全部着れるっていう感じね。鮮明に覚えています。服も消毒されたんだねきっと。よく分かりませんよ。

そして第一収容所も第二収容所もね、学校の教室なんですよ。そして三つに区切られてるの。縦を、こう。そうすると、三つに区切られて、座ったら立つこともできない、座って10センチくらい余るように、ここが三つ（に区切られた）教室ね、そこに入ったんです、みんな。小学校の教室を、引揚げの人がたが入るのに、きっと入っては次々こう、出ていくのにね。そしたら、うちの母が貯金通帳とかそういうの見つかったらね、返されないからって全部破って下のごみの中にね、名前分かんないようにして投げた記憶が今でも覚えている。それで、うちの母は、父と母のことになると、父はちょっと手のきく人だったんだよね、引揚げる時ってこの上に物を着て、この上にも物を着てってなんでもみんな物を持ってこようとする。そしたらロシアのお札ってカサカサとするのね。それをものを蒸かすようなところでね、柔らかくして繋いで、こういうところ（襟）の芯に、オーバーでもざっくりして芯にして縫ったり。それから今度母はね、生まれて3か月の弟のおむつカバーの、昔だったら布とビニールみたいな、ふちをめくってね、その中にロシアのお金をたくさん入れてきたの。私6人兄弟の長女で、女が4人、男が2人、この下の方の男の子が生まれて3か月だから、あなたはね、おちんちんのところにお金をいっぱいしょってきたから、私たちの兄弟の中で子どもが女の子が3人いて、孫が増えてってね、私たちわりと兄弟って子ども1人とかね、2人とかって少ないんだけど、その下の弟だけは、いつも話してる。あんたはね、股にお金をしょってきた人だから子宝に恵まれたんだねって私はよく言うの。

ほんとに、父と母から学んだことは、何があっても物事はよく考える。それから知恵を使うってことはね、両親から学ばせてもらった。だから、父と母にしたら弟をいかに連れてくるかっていうこと、もうすり減った神経を使ったんじゃないかなっていうことと、それから生活するのにやっぱり、樺太から引き揚げてこっちきてからね、苦小牧に来てからご飯の中に芋を入れたり、いろんなことをして北海道の人がたは食べてね、自分も苦小牧に来てから食べたけど、白米で生活してきたからね、食べ物豊かにして暮らしてきたんですけど。

そして第一収容所から今度は第二収容所って真岡の女学校ね。両方とも学校だったけれど、第一収容所が終わったら、今度は第二収容所に行くんですよ。そして、第二収容所ったら、例えば坊主山の上から見て、海の方を見た時に苦小牧の町になんにも物がないとして、学校だけがあってね。小高いところに学校があって、ずっとこう見たら、蟻がぞろぞろ歩いているように、みんな持つもの持って、年取った人が、洗面器に穴開けて、また物をこうやってぞろぞろぞろぞろ持った年寄りの人がいたの。そしたら途中で持っていけなくなったら捨てていくのね。そして、山から見たら横に10人くらい並ぶんですよ。こんななってね、こう歩いているのが山から見えるのね、船の方まで。そして、自分たちもそういうふうにして歩いてきたとき、途中で倒れたらここで捨てられて、それから、今度は船に乗って船の中で亡くなったら海に投げられて、それから一番記憶にあるのはね、第一収容所と第二収容所はトイレが大変。山を削って板を渡したトイレなのよ。

そしたらここで落ちたらもうね、誰も助けてくれないでね、死んでしまうの。結局山がこうあったらね、山のここ削ってね、渡すんでしょ。下の方。そういう経験もして。そして、小豆と乾パンが第一収容所、第二収容所ではよく出て食べたことを覚えています。

なんかね、もっともっと、でもそういうのが鮮明に覚えてるんですよ。蟻がぞろぞろ歩いてるみたいだね、自分たちも歩いてるときに、お歳取った人たちが欲長けてたくさん物持ってね、それを船に持っていくまでのうちに捨てていく姿だとか、倒れたらそのまま泣く泣くおいてこられたり、それから船で死んだら投げるの、海の中に捨てるのを見たり、なんかずっと、この今のプーチンが出るようになってから、思い出したくないことが思い出されて。でも父と母のこと話すことができて、きっとなんか私の心に踏ん切りがついたような気もしています。

聞き手：やはり昨今のロシア情勢を見ていると思い出しますか？

石塚氏：嫌なことです。忘れていたことがまざまざと思い出して嫌ですね。ウクライナとロシアのことがテレビに映ると消します。だけどロシアのやることは絶対汚い。汚いっていうよりも、やっぱり、叩いても、手を出した人が罪になる。あなたが悪くて喧嘩して、こっちが我慢できなくて叩いても手を出した人が罪になって、悪い人は罪にならない。物を盗んでも現場を押さえないとアレ（罪）にならないとかね。それから白パンの人のうちに遊びに行くと、とっても家の中を素敵に綺麗にしている。でも、黒パン食べてる人は居間がごっちゃごちゃだけど寝室は綺麗にするとかね。

それと、私自分が商売をやったときに活かしたことがあったんだけど、ロシアの人がたって家を建てるときにね、10センチの隙間を作って、そこに全部おがくず詰めるのね。外壁と内壁の間10センチくらい。そうすると、家の保温にもなるし、夏は涼しくて冬は暖かい。それから、音が聞こえなくなるって言うのかい、防音と温かみができるって。ロシアの人がたはそういう家の建て方をしてたのね。それを思い出して真似してお店を建てた時に、隣がラーメン屋さんだったので、音を聞こえなくするために、私の家建てるときにそういうふうをお願いって言って建てたんだよ。だからいかにね、いろんなことが記憶に残っててね。だけどやっぱりロシアの人がたは、簡単に人の物を盗みに来るね、泥棒をしに。問われると思い出すんだけどね、思い出したくないこといっぱいあるよね。だから、私たちは小さかったけれど、若い女性は絶対あまり表に出なかったよね。

7. 樺太の記憶について 総括、質疑

樺太のことって夢にぱっと出てくるんだよね。そして、しばらくそういうことを思い出さなくても何かあった時にね、みんな大人が座って泣いているときの姿だとか、それから父が銃を突きつけられた時とか、いろんなことが思い出されるんだけどね、忘れかけていたんだけどね、プーチンが出てからずっと夢に見るねやっぱり。この（聞き取りの）話があったんでね、父と母が本当に苦労してね、弟を連れてきたときの、来てから教えられたことだとか、来てからも北海道の人の生活スタイルの中で、ご飯の中に芋入ったり、大根入ったりしたのが食べられなくて苦労したことやら。だから今では食べることは好きだし、人に対しても食べることを一生懸命してあげるの、幸せに暮らさしてくれた両親と途中そういうのを見ているから、やっぱり人間の生活って食べることがきちんとなっていると、体も健康だし人に対しても優しくしてあげられるんだなあと思ってます。

聞き手：ということは、やはり北海道に引揚げてきた後の方が大変でしたか？

石塚氏：大変だったの。それでね、うちの母は私を産婆さんにしたかったらしいの。昔は女の人が職業持つっていうのをあまり好まなかったけど、これからの女の子は手に職を付けた方がいいからお産婆さんにしたかったらしいけども、私は、その頃髪結いさんって言ったよね、美容師さんの方が向いてるんじゃないかということで、札幌に出してくれたんだよね。おかげさまで7年修

行して、苫小牧に帰ってきて、旭町の飲食店のママさんたちにロングヘアのヒデ子さんと言われて、長い髪結うのが好きでね。そして店を出すことができて。その中でもブライダルの方を一生懸命やって、ずっと花嫁さん作りをさせていただきました。

聞き手：終戦後しばらくは樺太にいて（1年半くらい）その間はロシアの人は怖くなかったですか？

石塚氏：終戦後はね、怖くなかった。行き来した。行き来して遊んでました。たださっき言ったように生活のね、労働者の黒パン食べている人の所へ行くと茶の間に、居間に豚がいれば、鶏がいれば、わんこちゃんもいればっていうね、そしてやっぱり匂いもありますよね。けど外套みたいなこんな上に羽織るやつ、その中はワンピース1枚でいるような暖かいんですよ。だからそれが冬は暖かくて、夏は涼しいっていう建築の仕方。それを見てて私が26歳で店を持った時に、保温とそれとを考えて作ったんです。だからね、記憶してたんだよね。樺太のことって。

聞き手：ギリギリになって侵攻してきたロシアに対する嫌な思いとか、ロシアの人から差別を受けた記憶はありますか？

石塚氏：子どもだからなかった。なかったっていうより、一緒に生活するようになって、ロシア人と同居はしなかったけれど、子どもたちと遊びに行ったり、それから近所の家の白パンの人の所に遊びに行ったり、好かれた方だからね。そしたら、ああ、こういう生活が白パンと黒パンで随分違うんだなっていう印象はまともに受けた。

聞き手：親から（ロシア人と）遊ぶんじゃないとかは言われなかったんですか？

石塚氏：なかった。ロシアの人たちって遊ぶものないもんだから、ここに丸太を置いてこっち乗ってボンと飛び上がるとか、そういうことをして遊んでた。それから、ロシアの子ども達ってパンツを履いてないのね。だから、私達が「パンツ履いてない！」って言いながらお尻めくりをして遊んだことも覚えています。そして、出窓のある家に来てはよく物を盗まれるのね。私がたは単語帳で勉強したの。ロシアの人と一緒に生活するから。スペルは書けないよ。だけど、ありがとってこっちに書いたらスパシーボだとか。随分忘れたけど、やっぱり覚えてるんだね。ロシア語って濁音が多いんだよね。そしてスキーがやれたのね、雪が多いところだから。だからこっち来て、スケートが苫小牧は主流だけど、私はやっぱりスキーの方が今でも乗れるような気がする。

聞き手：樺太は苫小牧よりずっと寒かったという証言もありますが、そういった記憶はありますか？

石塚氏：寒さが堪えたっていう感じはないですね。ただロシアの人がたは刺子のような厚いのを羽織って、脱いだらワンピースくらいでね。だから外と家の中の空気は全然違うんだよね。

聞き手：終戦になった後に（大庭さんは）お酒屋さんを辞めてたっておっしゃったんですけど、お父さんの終戦後のお仕事というのは、そのまま酒屋さんで一緒にお漬物をしてたんですか？

石塚氏：いや、お漬物はしてない。そのへんはよく分からない。

聞き手：たまにロシア兵が家に来ることはあったんですか？

石塚氏：家には来ました。コペコペって、交換しましょうってことで。私たちはお砂糖欲しかったし、向こうはお米欲しかったから、お米をあげたらお砂糖少しくれたりね。

聞き手：敗戦国に日本がなって以降、ロシア兵が略奪行為をしたというイメージが強いので、対価交換する姿は意外ですが…。

石塚氏：意外でしょ。そうね、家に塗物、例えば茶筆筈とか、日本の素敵な塗物があるでしょ。そういうものには興味があって欲しがったから、そういう時には物と交換した。野田では略奪をされたことはない。私の知っている範囲では。ただ町によってはやっぱりあったかもしれない。真岡に住んでいた叔母がいるから、聞いてみたら別の話が聞けるかもしれない。

（樺太のことは）鮮明に忘れないんだよね。引揚げるときにみんな野田から真岡に行くのに列車に乗るところに、人があふれてあふれてね、上に乗ったり、デッキにつかまって乗ったり。私は父がみんなの監督をして貨物列車に全部家財道具をね、みんな積むでしょ。その間にね、私ぼつんと置かれて、見たら駅から汽車が発車するのを父が見送りに行ったときに人が溢れてね、そこに母たちが真岡に旅立って、私はもう一つの貨物列車の方で父と乗って行ったんだよね。そんなこととかね、土手みたいなところを登らされたこととか、裸にされてそういうところ通って、とかね、みんな蟻みたいに歩いて死ねば投げられて、それで帰ってきてから分かったことは弟のことだね。どれだけ父と母が苦勞したのかなとかね。でもね、ロシアの子どもたちとは遊びましたよ。お家にも行ったしね。朝鮮の子どもたちも遊んだよ。学校で使う言葉は日本語だけど、ロシアの人がたは、分かることは分かるけど、分からないことは分からないなりに。ただ1つのクラスがあったらロシアが半分。あとの半분을朝鮮と日本と分けて日本が少なくなってるね。そして、窓から眺めて朝鮮とロシアの人たちの体育をやっている時に見て、疑問に思っていること先生に聞いたら、試験制度があつて上がっていかないって、さっきのね。

聞き手：先程おっしゃっていた土手を登ったっていうのは、列車を降りてから収容所に行くまでの間ってことですね。

石塚氏：はい。お天気の悪いときね。後で考えたらね、こう山だから、こういうふうになだらかなところをね、時間かけて登らないで（急斜面を）登ったあの時の思いは何だか恐ろしかった。

聞き手：引揚げるとき近所の人も一緒にしたか？全然違ったんですか？

石塚氏：全然違う。それは記憶してない。ただ、引揚げ一緒になってこの引揚げの教室を三つにして一緒になった人がたは話し合ったけどね。横になれないよね。おっちゃんこするくらいだからね。1マスずつ区切られてそこにね。そして食事はあずきと乾パンね。

いつも心の奥に有りました戦争体験、生活の様子、引揚げ、色々と忘れないでいた様子（子ども心に忘れられない事）等を聴いて下さいましたことに感謝します。心が軽くなりました。

少しでも早くウクライナとロシアの戦争が終わることを願いつつ、今は毎日を好きなことと楽しい食事をし、充実した生活を過ごしております。ほんとうにありがとうございました。

聞き手：こちらこそ、たくさんの貴重なお話ありがとうございました。

¹ 9工場全てが王子製紙の運営となったのは昭和8（1933）年の王子製紙、樺太工業株式会社、富士製紙株式会社の三社合併によるものであり、それ以前の運営元は泊居工場、真岡工場、恵須取工場は樺太工業株式会社、落合工場、知取工場は富士製紙株式会社である。

² 玉音放送が流れた当時の様子。

³ 漁でとれた魚を運搬する際に使用された木製の背負い箱。



図1 野田町および製紙工場の立地した市町

※原暉之、天野尚樹編『樺太四〇年の歴史—四〇万人の故郷—』
(一般社団法人全国樺太連盟、2017年)を基に筆者が作成

苫小牧市内で発掘されたアイヌ文化期の丸木舟

岩波 連^{※1}

1. アイヌの舟

アイヌが使用していた舟は大きく3種類あるとされている。木をくりぬいて作られる丸木舟【チプ チ=我ら、オプ=乗るもの】、板を横にくくりつけた板綴り舟【イタオマチプ イタ=板、オマ=付く】、木の枝などの骨組みに樹皮を張り付ける樹皮舟【ヤラチプ ヤラ=木の皮】である。また、この他に文献によって道東では桜樹皮綴り舟【カリンバテシカチプ カリンバ=桜皮、テシカ=綴られた】、道南では和船の影響を受けた縄綴り舟があるとされている。チプは河川、湖沼用、イタオマチプは海洋用、ヤラチプは狩猟や緊急時に使用する簡易的な舟として使い分けていたとされている。いずれも漁労や交易、移動などに用いられ、重要な道具であった。

江戸時代に蝦夷地を探検した和人によって残された書物には、これらアイヌが使用していた舟について絵図や制作方法などが記述されている。特に村上貞助によって完成された『蝦夷生計図説』の「チツフ之部 上下」には、舟の制作に関して木の伐採から一連の工程について詳細に言及されている。現在、道内各地の博物館、あるいは生活館などに展示されている復元された丸木舟や板綴り舟は同書を参考にして作られたものがほとんどである。

2. 遺跡から出土する舟

舟は基本的に木製であるため遺跡から出土するケースは稀である。木製品が遺跡から出土するためには河川や湖沼、湿地帯などの木製品が朽ちてしまわない環境が必要となる。道内に現存する丸木舟については由良勇によって集成が行われており、2002年段階で59艘とされている。その後、各地で丸木舟の制作が行われていることが新聞などで報道されており、恐らく現在100艘を超えと考えられる。多くは民族文化の伝承保存や制作方法の技術継承などを目的とした復元品や明治時代から昭和時代にかけて実際に使用されていた資料であり、土中や川岸などから見つかった舟は少ない。これまでのところアイヌ文化期あるいはその前段階である擦文時代のものも含めて、松前町、長万部町、札幌市、千歳市、月形町、美唄市、苫小牧市、厚真町、厚岸町などで発見された資料が土中や川岸から発掘されたものであるが、そのなかで遺跡として登録されているのは、松前町福山城下町遺跡、札幌市K39遺跡、千歳市根志越3遺跡、千歳市美々8遺跡、千歳市ママチ川丸木舟遺跡、千歳市ユカンボシC15遺跡、苫小牧市沼ノ端丸木舟遺跡、苫小牧市柏原丸木舟遺跡、苫小牧市旧安平川丸木舟遺跡である。ここに挙げた遺跡も多くは舟の部材の一部や櫂などの推進具であり、舟の形状が分かる状態での出土例はさらに少ない。これらの遺跡から見つかった丸木舟に関しては、層位や共伴した遺物から使用されていた年代が推測されており、一部の丸木舟に関しては年代測定も行われている。

3. 苫小牧市内で出土したアイヌ文化期の丸木舟

苫小牧市内で出土したアイヌ文化期の丸木舟で広く知られているのは、旧勇払川沿いから出土した5艘の丸木舟であろう。「アイヌ丸木舟及び推進具」として北海道指定有形文化財に登録されている。道内で見つかっている他の丸木舟と比較しても、保存状態や一度に5艘発掘されたことなど一線を画し

※1 苫小牧市美術博物館 学芸員

ている。3艘がチブ、2艘がイタオマチブであり、いずれも舳先から艫までほぼ完形で残っており、うち1艘には舷側の外側にアイヌ文様と見られる文様が彫られている。出土した際に舟の内部に樽前b降下軽石層（Ta-b）が溜まっていたことから、Ta-bの降下年代である1669年以前に使用され、埋没したものと考えられている。出土後に共伴して出土した推進具を用いた年代測定では、 770 ± 80 y.B.P. (GaK-4371) が示されており、更に使用年代が遡る可能性もある。

この他に市内では柏原丸木舟遺跡（J-02-33）、旧安平川丸木舟遺跡（J-02-136）、弁天海岸出土丸木舟2艘が見つかり、苫小牧市内では合計9艘の舟が発掘されてきた。これは道内の一つの自治体から発掘された数としては最多である。このうち柏原丸木舟遺跡と旧安平川丸木舟遺跡出土の丸木舟については、これまで論文や報告書で詳細が報告されたことがなく、柏原丸木舟遺跡が苫小牧市史でわずかに触れられている程度である。弁天海岸出土丸木舟は2021年に苫小牧市東部の弁天海岸で発見された2艘の舟で、ともにイタオマチブであるとみられる。この2艘については現在国立アイヌ民族博物館と共同で保存修復と調査研究を行なっているところである。本稿では、柏原丸木舟遺跡と旧安平川丸木舟遺跡について、調査の経緯から見つかった丸木舟の詳細を述べていく。

4. 柏原丸木舟遺跡

柏原丸木舟遺跡は、1969年9月に苫小牧市東部柏原地区にあった市営柏原放牧場内で発見された。この頃は苫小牧東部工業地帯の開発が始まる前であり、辺り一面湿地帯であったが安平川の河道改修工事や土地改良のための排水溝設置などにより、徐々に草原化していくなかで市営の放牧場として利用されていた。遺跡付近は旧安平川の河道があった場所で、干上がってしまった蛇行部分から丸木舟は発見された。発見者は柏原部落会長であった佐藤貞氏らで、行方不明となった放牧馬を探すなかで偶然地表に露出している丸木舟の舟縁を見つけ、苫小牧市教育委員会（以下「市教委」という。）へと報告した。

同年9月27、28日に市教委によって発掘調査が実施された。それに先立つ20日に現地調査が行われ、丸木舟は船底部分が消失していることが判明した。9m×3m=27㎡の調査区が設定され、舟のちょうど中央部分にセクションベルトを設けて層位を確認した。発掘区の層序は第1層が表土層、第2層が赤褐色の腐植土層、第3層が樽前a降下軽石層（Ta-a）、第4層が黒色腐植土層、第5層がTa-bとなっている。地表より30～40cmほど、第2層と第3層の境あたりから湧水している。先に述べたように丸木舟の船底は消失しており、舷側の下部はTa-a層にとどまっていた。舳先、艫ともに腐食が進んでおり、ほとんどが小破片となっている。セクションベルトを取り除くと、舷側は倒れ、2枚の板状になってしまった。舟の他に付属品は発見されていない。船底は舷側の上面から30cmほどのところで木目に沿って切れていることから、発見地点で埋没する前に消失し、自然に埋没したものが河川の改修によって水位が下がった結果、地表に現れたものと考えられる。舷側がTa-a層内にあること、船内にTa-a層が降下していること、Ta-b層と舷側の下部の間に第4層があることから、Ta-bが降下した1669年からTa-aが降下した1739年の間に発見地点に埋没したと考えられる。舷側部分の全長は約6m40cmである。舳先、艫ともに腐食しているため、全長は残存部分からの推定となるが、およそ7.5mほどと考えられる。舟の木片を用いた年代測定では、 820 ± 90 y.B.P. (Gak-12285) が示されており、埋没状況から推定されるものよりも古い値となっている。

5. 旧安平川丸木舟遺跡

旧安平川丸木舟遺跡は、1981年3月に苫小牧市東部柏原地区で行われた排水路掘削工事の際に発見された。重機によって舳先部分が破壊されている。

3月28、29日に市教委によって発掘調査が実施された。丸木舟はTa-b層より下で発見され、地表からおよそ1.4mの深さにある。船底には厚さ4cm前後の泥炭が付着していることから、発見地点に埋没したのはTa-b層が降下した1669年より古いことが考えられる。舳先と艫がともに消失しており、舷側部分も船底から立ち上がった辺りから上は消失している。現長5.5m、最大幅66cmで推定される全長は、およそ6m前後と考えられる。船尾近くの船底に亀裂があり、その亀裂の左右に亀裂の拡張を防ぐためと見られる補修孔が12個前後見られる。補修孔は細長い四角状で、内面が広く外面に向かって狭まっていることから、船内から船外方向にかけてあけたものとみられる。亀裂の両側に規則正しく並んでいることを考えると、補修孔をあけて紐のようなもので縛るような使用方法が考えられる。道内の他のチプやイタオマチプにはないものであり、舟が破損してもできる限り修復して使おうとしていたことがわかる。舟の木片を用いた年代測定では、 1280 ± 90 y.B.P. (Gak-10922) が示されており、埋没状況から推定されるものよりも古い値となっている。この値だと擦文時代の頃となってしまうため、再度の測定及び最新の暦年較正を行って検証する必要がある。

6. まとめ

苫小牧市内では道内で最も多くの舟が見つかっており、いずれも部材の一部などではなく、舟本体が確認されている。また、チプ、イタオマチプのいずれも確認されており、内水面外水面ともに舟を用いた漁労や運搬、移動が盛んに行われていたことがわかる。なぜ苫小牧では、これほど多くのアイヌの舟が見つかるのか。一つにはいわゆる「勇払越え」のルートが苫小牧にあったことが挙げられる。東西蝦夷地を行き来する重要なルートであり、勇払川から美々川、美沢川を越えて美沢、千歳間を陸路で越え、千歳川から石狩川、日本海へと至る蝦夷地における物流の基幹であった。その途上である苫小牧と千歳でこれまで多くの舟が見つかることが、「勇払越え」が重要なルートであった物的証拠であると、これまでも多くの文献で指摘されているところである。一方で、今回紹介した2艘の舟はいずれも勇払川沿いではなく、安平川沿いで発見されている。沼ノ端出土の5艘とは異なり、舳先や艫、舷側が腐食していることから発見地点より上流で使用されていたものが破損などにより流出し、流れ着いた地点で環境に恵まれた結果、今日まで残ったと考えられる。このため、苫小牧では「勇払越え」で千歳方面に行くルートと、安平川を使い、安平・夕張方面に行くルートがあったものと考えられる。

アイヌの舟に関しては、これまで発見数が少なかったため、年代や地域における舟の形状の差異、制作技法などについてはあまり研究が進んでいない。数少ない舟の形状についての先行研究では、難波が舟の形状について「八雲型、千歳型、静内型、釧路型、石狩型、月形型」の6地方型があるとし、苫小牧の5艘は八雲型、千歳型に属するとしている（難波 1991）。由良は苫小牧の5艘は形や削り方に類似点が多く、同じ製作者あるいはグループによるものであること、一般の舟と舳部側面、内面、裏面などに形状の差異がみられることが指摘されている（由良 1995）。厚真町や苫小牧市ではアイヌ文化期の舟が近年も発見されており、まだ勇払原野には未発見の舟が眠っていると考えられる。今回紹介した資料をあわせて今後アイヌの舟に関する研究が進む中で、例えば地域や時代による制作技法や形状の差異がみられるのか、それは周知のアイヌの地域グループとどのように関係があるのかなど、より多くのことが明らかになっていくと考えられる。苫小牧は最多の舟が見つかる場所であり、これまでの調査研究を踏まえた上で、今後も最新の情報を提供していきたい。

参考文献

- 小野慶郎 1967「苫小牧市勇払川埋没丸木舟発掘記」『北海道の文化』11:72-87.
- 佐藤一夫 1967「アイヌの丸木舟」『郷土の研究』2:65-71.
- 苫小牧市教育委員会・市立苫小牧図書館 1966『苫小牧沼ノ端丸木舟発掘調査概要報告書』
- 中田幹雄ほか 1975「石狩低地帯における最近の14C年代資料」『開拓記念館調査報告』第9号:1-14.
- 難波琢雄 1991「アイヌ丸木舟の地方型」『アイヌ文化』第16号:5-21.
- 深澤芳樹 2014「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧」『国際常民文化研究叢書』5:185-233
- 藤井誠二 2008「木製品：その分類基準と北海道における変遷の特徴」『北海道大学総合博物館研究報告』4:9-132.
- 堀江敏夫 1971「アイヌの板綴舟について一文献を中心とした一」『郷土の研究』3:2-31.
- 由良勇 1995『北海道の丸木舟』

表1 苫小牧市内出土丸木舟一覧（（ ）は残存部での計測値）

名称	遺跡名	発見年	全長	幅	深さ	舷側の 穴の数	年代測定	備考
0号	沼ノ端丸木舟 遺跡	1966	9.3m	0.94m	0.3m		770 ± 80y.B.P. (GaK-4371)	0号附属品として櫂の 破片1、棹2本、1号附 属品として櫂1本、棹 の破片8が出土、いず れかを年代測定に使用
1号	沼ノ端丸木舟 遺跡	1966	7.85m	0.74m	0.3m			
2号	沼ノ端丸木舟 遺跡	1966	6.5m	0.74m	0.3m	40		
3号	沼ノ端丸木舟 遺跡	1966	7.4m	0.73m	0.35m			附属品として棹1本
4号	沼ノ端丸木舟 遺跡	1966	7.66m	0.74m	0.27m	70		
柏原	柏原丸木舟 遺跡	1969	(6.4m)				820 ± 90 y.B.P. (Gak-12285)	
旧安 平川	旧安平川丸木舟 遺跡	1981	(5.5m)	0.66m			1280 ± 90 y.B.P. (Gak-10922)	補修孔あり
弁天 海岸 1号		2021	6.1m	0.64m		(18)		
弁天 海岸 2号		2021	(4.1m)	0.45m		(8)		

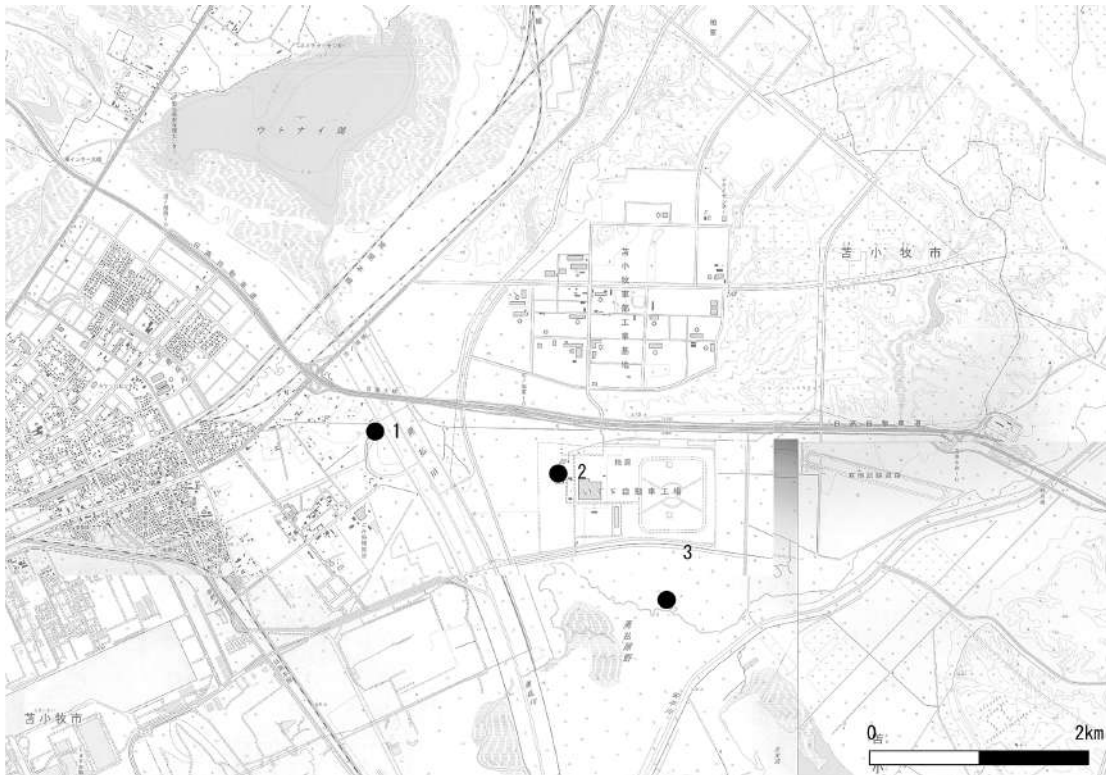


図1 丸木舟発見地点(1沼ノ端、2柏原、3旧安平川)

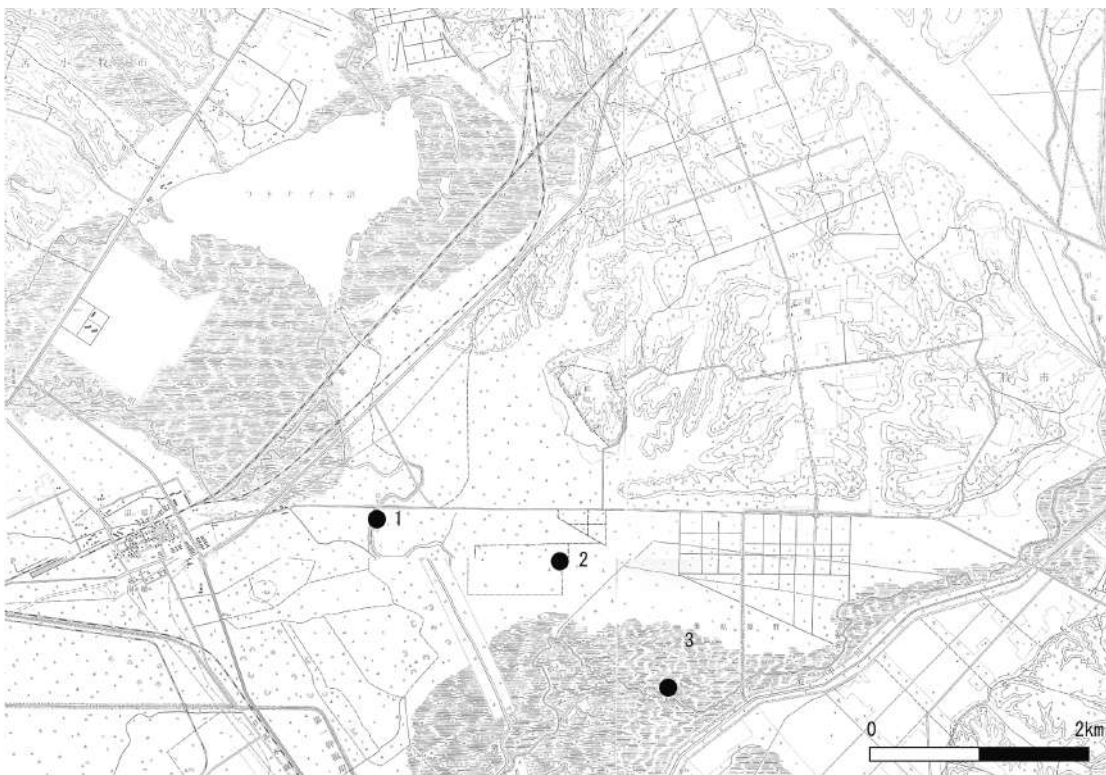


図2 丸木舟発見地点(1沼ノ端、2柏原、3旧安平川)
1972年発行勇払、1970年発行上厚真、1970年発行沼の端、1969年発行遠浅の1/25000地形図を合成

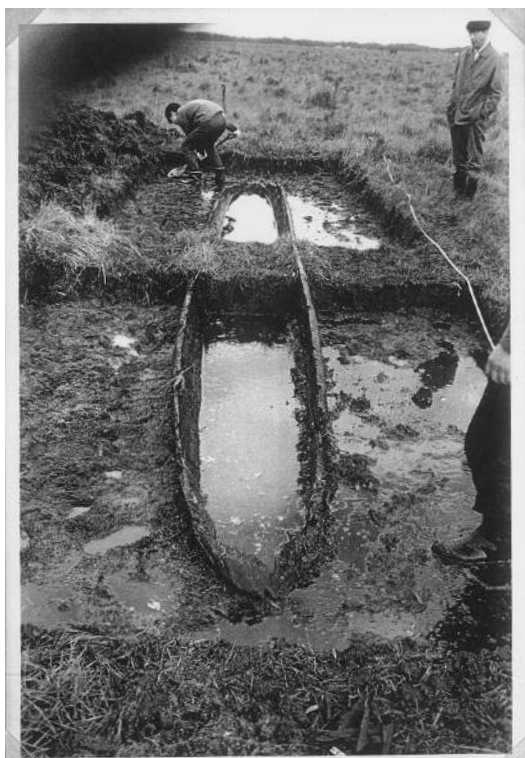


図3 柏原丸木舟発掘風景(1969年撮影)



図4 旧安平川丸木舟発見時(1981年撮影)



図5 旧安平川丸木舟全体図(1981年撮影)



図6 旧安平川丸木舟発掘風景(1981年撮影)



図7 旧安平川丸木舟全体出土状態(1981年撮影)
○で囲った地点に亀裂と補修孔がある

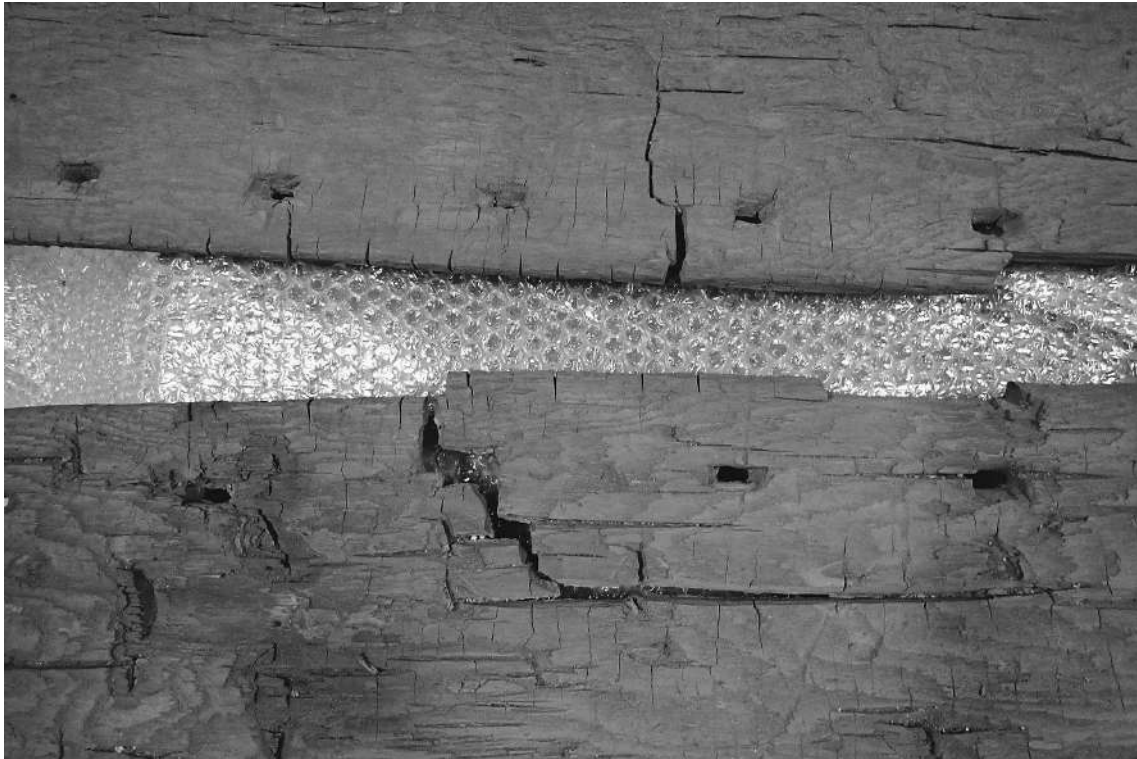


図8 旧安平川丸木舟亀裂・補修孔(2023年撮影)
資料が乾燥したため、亀裂が左右に拡大している



図9 旧安平川丸木舟補修孔拡大(2023年撮影)

苫小牧市美術博物館 紀要
第8号
(令和4年度)

発行日	令和5年3月
編集・発行	苫小牧市美術博物館 〒053-0011 北海道苫小牧市末広町3丁目9番7号 TEL 0144(35)2550 FAX 0144(34)0408
印刷	(株)とまみん印刷センター

